

「CAN-DO リストを活用した外国語教育」

札幌市立発寒中学校

■はじめに

本校は総学級 22 クラスであり、英語科の担当教員が 6 名在籍している大規模校の一つである。CAN-DO リストを活用した外国語教育に取り組むに当たっては、教科内での話合いの時間の確保からスタートした。第 1 学年での習熟度別学習も実施しており、全員が集まるのが難しく、意識的に同学年をもつ教員同士、時間を割いて話合いをするよう努め、共通理解を図った。

本校で CAN-DO リストの取り組みが始まったのは平成 26 年度であり、一年をかけて作り上げることができた。今年度は「その実践的な活用」を目標とし、学年ごとにパフォーマンステストや日常の授業へ反映させる取り組みを始めた。今後は「学年間のつながり」と「年度開始時に生徒や保護者に提示できる CAN-DO リストの作成」を目標に研修を続けていきたい。

■日常の実践指導と評価の工夫

【場面設定の重要性】

CAN-DO リストでは、4 技能を用いて何ができるようになるかを「～することができる」という具体的な文によって記載するものであり、言語の具体的な使用場面における能力記述文である。そのため、生徒同士がペアで行う会話練習などの日常のコミュニケーション活動においても、ただ活動させるのではなく、いつ、どこで、誰が、どのような状況であるかなど、具体的な「場面設定」をしっかり意識することを大切にしたい。ALT を含めた教師側も、会話の場面設定を明確に提示するよう努めて取り組んだ。また、取り扱う場面設定も生徒たちにとってできるだけ身近な題材を扱うようにしたこと、生徒には必要感をもたせ、自分の言葉を用いて英語を活用させる場を設定できた。例えば、鉄道を利用した道案内の場面では、札幌市の交通に置き換えたり、買い物の場面では教科書の表現の他に色やアイテム、シチュエーションを加えたりすることで、より実用性の高い活動となるように工夫した。パフォーマンステストにおいても、同様に具体的な場面設定を行い、実施した。生徒にとって身近な題材で具体的な場面設定を行うことで、実際に使える英語を学習することができる。

【評価基準の明確化】

これまでもスピーチやスピーキングテストによる評価を実施してきた。本校は大規模校で、学年に複数(2～3人)の教員配置のため、パフォーマンステスト実施の際、同一の基準で評価するため、スピーチテストを教師 2 人で評価したり、スピーキングテストを 1 人の教師がすべての学級を回ったりするなどの工夫を特に行ってきた。

今年度は CAN-DO リストを基に担当教員同士でパフォーマンステストの評価基準を話し合ったため、評価を行う観点のはっきりとし、評価基準をより詳細かつ明確化したことで、従来のような特別体制を組まずに、個々の教員が明確化した評価基準に基づいて評価できるようになった。今年度は学年内のものに止まったが、今後研修を深めながら、より CAN-DO リストの目標に沿った評価を行うことで、4 技能を用いて何ができるようになるかを目指した評価材料、実施時期、評価方法、評価基準を 1 学年から 3 学年のつながりと教科内の共通認識のあるものにしていきたい。

【従来の取組を生かした横断的な活動】

旅行的行事は、生徒にとって 1 年間の中でも最も重要であり、思い出に残る行事の一つである。2、3 学年は 6 月の旅行的行事終了後、「旅行記 My School Trip」の英作文を実施している。体験してきたこと、楽しかったことなど英語で表現し、清書したものは、書体や挿絵を工夫させて全員分を廊下に掲示している。これまでは、習った文法や単語を用いて英語で表現し、一つの作品を完成させたという自信をもたせることを重点に取り組み、作文を書くことの評価の対象とはしてこなかった。CAN-DO リストを意識すると、2 学年では書くことの目標「過去の出来事を相手に正しく伝えるまとまりのある英文を書くことができる」、3 学年では「興味、関心のあることや身近なものを紹介する簡単な文章が書ける」という目標に対する達成状況を把握することができ、ライティングのパフォーマンステストの一つとして実施できる。また、他の生徒が書いた旅行記を学級内で読み合い、英語で感想を交流する活動に発展させることで、3 学年の読むことの目標「初見の文章でも意味を考えながらだいたい読める」の達成状況の把握にもつなげることができる。

このように、CAN-DO リストを通して、従来の取組を

活用して四技能を統合する活動に発展させることができる。

■教科書との関連

本校では、これまでデジタル教科書や各教科担任が自ら作ったデジタル教材などを用い、教科書の音読を徹底させている。ICTによる視覚的効果を十分に活用して、教科書で扱う単語・熟語・定型句などを定着させている。そのほか、英文法は会話を支える知識であるため、夏・冬の英語スプリングテストや文型テストも実施している。

CAN-DO リストの活用を意識すると、教科書を教えるところから、教科書を活用して教えることを心がけるようになった。生徒の4技能の向上のため、POWER -UP SPEAKING、POWER -UP、POWER -UP LISTENING、WRITING の活用はもちろんのこと、MY PROJECT においては、書くこと、話すこと、聞くこと、読むことの活動が統合され、知識・技能を活用して思考したり表現したりする力の定着を狙うことができる。

実際に自分たちが経験した学校祭、合唱コンクールなどを題材として扱い、思い出や出来事を書き、そのことを級友に伝えるとともに、級友の思い出を聞き、級友の英文読んだりすることができる。書くこと、話すこと、聞くこと、読むこと目標があるため、普段の授業でも目標に向けてどのように達成させるかを考えるため、授業でどんなことを取り扱うかを考える機会が増えた。ReadingING 教材においても、ただ内容を読みとるだけではなく、読み取った内容を級友に伝えたり、概要を英語で書いたりする活動を意識するようになった。

■成果と課題

【成果と課題1：実践を振り返って】

今年度のCAN-DO リストの取組は、昨年度作成した大枠を各学年の英語担当教員が意識し、実践的に活用していくことを目標として進めてきた。意識することによって、日々の授業を改めて振り返るよい機会となった。従来行われていた活動を見直したり、一つの活動を複数の技能にまたがるような活動を考えたりするようになった。この実践を踏まえて、次年度は是非、年度当初に生徒や保護者にしっかりと提示できるものを準備していきたい。

また、CAN-DO リストの作成と実践は、英語担当教員間のコミュニケーションが欠かせないことも実感した1年間であった。今年度は学年内でのコミュニケーションが主なものであったが、本来は卒業時の到達目標

を見据え、それに向かって各学年の目標がしっかりとリンクされているべきものであり、当然英語科全体でのコミュニケーションが必要不可欠となる。その意味で、英語科全体での話し合いの機会と時間を生み出していくことが今後の大きな課題の一つである。

また、それぞれの学年の能力や持っている雰囲気、個性やカラーも違って、3年間分を作成したCAN-DO リストは果たして次年度にどうやって橋渡ししていくのかも課題でもある。さらに目の前の生徒に見合ったものに適宜修正していかなければならないところもでてくるのであろうが、今年度作成したものをもとに精度を上げていき、よりよいものにしていきたい。

そのためにも、常に生徒の実態を把握し、卒業時の生徒の姿をイメージしながら、教科として共通理解を進めながら、授業改善に臨みたい。

【成果と課題2：改善に向けて】

成果の一つにパフォーマンステストのときに使ったチェックシートで、生徒が自己評価で「英語で何ができるか」について客観的に確認できたことである。自己確認することでわかる喜び、できる喜び、さらに見える到達目標が明確になり、やる気をださせることにも成功した。指導する教師側からしても、漠然とした年間計画よりも具体的なCAN-DO リストを用いることによって、生徒に何を強化して、何ができるようになってほしいかが明確になる。教師と生徒が目標と指針を一致させることによって、授業の方針が明確になり、生徒たちの理解度・定着度・達成感を共有できるツールの一つになった。

しかしながら、リスト自体を細分化し過ぎたり、数値目標を強調してしまったりすると、数値や達成値だけがリスト・全てになってしまい、授業の道しるべのはずのリストがただの達成度テストになってしまう。そうはならないよう、生徒にとってはさらに学ぶ際の身近で目標となるリストとしてあるべきだと考える。